

# 看護を省みて

北2階病棟 発表者 松本 あつ子

山崎 菊美・赤羽 ヨシエ・山崎 なか江・横林 藤子  
曾根原 純子・金井 洋子・窪谷 いく子・一条 友子  
召田 久美子・滝沢 信子・赤沢 純子・小池 万喜子  
土屋 久美子

## I はじめに

私達の毎日行っている看護とはいったい何であるかという疑問や不安が断えない、なぜならそこに患者＝人間という大きなとらえどころのないものにぶつかるからではないだろうか、そして又自分達も人間であることに気付くからではないだろうか。今回私達はこの大きな疑問から、各自日頃行っている看護の目標・行為に視点をあて、そこから出る問題・不満・不安を率直に出し合い、今後の看護に生かせるよう、研究にとりくんでみた。

## II 方法・実施

A, 自由記録により、看護側へは、

- ① 自分が日頃どんな看護をしているか
- ② 何を目標としているか
- ③ 1日何をしているか
- ④ 1日のうち何をしたいか
- ⑤ 何がめんどうか、何がいやか
- ⑥ 自分が病棟の中で一番問題だと思ふこと

B, アンケート法により、患者側へは

- ① うれしかったこと
- ② いやだったこと
- ③ 不満に思ふこと
- ④ 看護婦に何をしてもらいたいのか
- ⑤ その他

以上の方法で、それぞれから意見を募ってみた。

まずA, について

- ①から  
・何時も笑顔で訴えを聞く・対症看護・スムーズに診療が運ぶようにする・患者の不安の除去に努める・おしつけや自己満足に終わらぬよう気付く・めんどうがらずやる・患者との約束を破らない・患者が訴えやすいよう良い人間関係をつくるようにする など

- ②から  
・常に科学的で、日々の処置に明け暮れることのないよう・患者の気持ちにふれられるよう、話しを良く聞ける聞き手になる・信頼される看護婦になれるよう・患者が入院中安楽にすごせるよう・患者のよき相談相手として患者から待たれる看護婦になる・医療スタッフの人間関係が互いに信頼できるよう話し合う・言葉づかいに気をつける など

③から

・記録ばかりにおわれている・対症看護を行っている・機能的な日課を過ごす・その日の気分によりむらのある患者への対応 など

④から

・患者と落ち着いて会話のできる時間がほしい・カンファレンスを持ちたい・患者の側へ立った看護  
・心のかよえる看護・足浴・身のまわりの世話・チームナーシングを行い統一した看護がしたい など

⑤から

・患者から質問されること・患者と医師の間であつてうまくいかないこと・看護日誌などの記録・目標の看護にそえないこと・スタッフ間がうまくいかないこと・他人の責任が自分にまわって来た時など

⑥から

・チーム仲間がばらばらであること・患者に看護をおしつけ、看護側のペースに患者をまきこもうとすること・反省する事を忘れていること・患者、医師、スタッフ間それぞれとコミュニケーションがとれないこと・患者の立場に立つより仕事を優先していること などが出来た。

Bについては

うれしかったことなどに、・いつもここにしてくれること・自分の訴えた事が医師に正確に伝わっていたこと・何げない言葉や処置の事など、不満に思ったり、いやだったことにつき・気嫌の悪そうな看護婦がいたこと・訴えた事が医師に伝わっていなかったこと・たのんだ事がやってもらえなかったこと・治療や検査の結果についてつんばさじきに自分がいると感ずること などが出来た。

### Ⅲ 問題と思われる事

自由記録により、私達はそれぞれどんな型にしろよりよい看護をしたいと願っていることがうかがわれる。それは患者とのコミュニケーションを多くとる事であったり、科学的に充分研究するものであったり、患者の身のまわりの世話をすることであったりする。しかし、そのままそれぞれの心の中にあるばかりで互いに高めあうという姿勢には欠けていたようである。また患者を中心という考え方は充分にあるにもかかわらず、私達は自分を中心と考えすぎているのではないだろうか。患者のためにと言いながら、自分自身の身を守るような行動を多くとっていることはみんなが感じている所だと思う。又雑用や、機能的なものに時間をとられ、患者と接する時間が多くとれないことについてもそれぞれがどこかしらあせている所がうかがわれる。そして私達はスタッフ間の人間関係にも大きな問題があることをあげなければならないと思う。

### Ⅳ 考 察

患者は病人とし多くの問題点をかかえ、その中で人間として一步一步自己の力で問題を解決していく、私達は全てに手をかすことはできない。しかし患者が一人で解決できなくなった時、そこでそつと手をさしのべられるような看護婦になりたいと思う。それにはまず第一に、私達自身の心身の成長・発達と考えるわけである。自己についての分析・批判、患者と接し自分が今何を考えるかという看護婦自身の自覚、また患者が何を考えるかを一方向からでなくあらゆる触覚を駆使した知ろうという心の姿勢、そういった看護婦の心の中が看護にとり大きな役割を果たすものだと思う。今回自由記録により、自分自身に問題をつきつけ考えたということで、今まで何げなくやりすごしてしまった日常の会話や、行動に一人一人少なからず反省点を見出すことができたと思う。しかしただそのみ

にとどまらず、この姿勢を毎日の中でどのようにくずさず訓練していくか、それは互いに批判するという段階と考える。今までとは視点をかえ看護婦一人一人としてでなく、チームとしてアプローチできるようにということで具体的にカンファレンスを持った。このカンファレンスを持ったことで一層患者への目の向け方が多角的なものになったように思う。しかし今までと変わらぬ業務の中で患者との接触の時間を多くとるには、時間的な余裕のなさや、看護側の焦りが新たな問題となった。そこで一日のなかでどのように時間をつくり出すか、「今までの4回の検温を3回とする」「記録の重複をさげ、記録時間の短縮を図る」という2点につき試みてみた。3回の検温となり、看護側にも余裕ができ、患者と接する時間を多くとれるようになってきた。また記録についても、細い点の各自の注意は必要であるが、滞りなく行なわれていると思う。以上のように新たに日々行なわれる看護を改善できるのも一人一人に心の余裕があるからだと思う。今までと変わらぬ行為の中にも、「なぜ?」「どうしたら?」と疑問符を心の中でつぶやいたらどうだろう、そしてそれを素直に表現してみたらと私達は考える。患者よりアンケートをとり、意見を聞こうという試みは、日常私達が行ってきた今までの看護と、これからの看護のギャップを是正するためにと施行してみたが、匿名にもかかわらず遠慮や不安があるのだろうか、あまり率直な意見は出て来なかった。やはり自分達で確めていくより方法がないのだろうと考える、しかし私達の一挙一動が患者へ与える影響が大きいということをもっと私達は知らなければならないと思う。

## V おわりに

まだまだ未熟と思わざるを得ないが、医療の中に於て大きな部分を占める病棟看護とは、一口に患者が事故のないよう病気が治癒し社会復帰すること、又は死を迎えることであり、肉体的・精神的に安楽であれるよう援助することだと思う。この看護の中で根ざすものは私達一人一人が主体性を持つことであると強く感じ、そして主体性を持つことがケアーに大きく影響するものであると思う。今回この研究をすすめる中で、お互いにわかりあおうと努力できたことは人間関係を築き、ささやかではあるが看護の質の向上につながるものではないかと思う。最後に、この研究にあたり御協力下さいました方々に深く感謝致します。